

国際交流事後活動ニュース

MACRO COSM

◎特集 国際青年交流会議2004
ターニング・ポイント

マクロコズム 2004.11



vol. 61

(財) 青少年国際交流推進センター

— 国際青年交流会議2004 —

(2004年7月12日)



レセプション

▶ 外国青年と懇談される皇太子殿下



▲ 歓迎の挨拶をする小野清子内閣府特命担当大臣（青少年育成及び少子化対策）



▶ 外国招へい青年を代表して挨拶をするドミニカ共和国のナショナルリーダー

「国際青年交流会議」は、皇太子同妃両殿下の御成婚を記念して、平成6年度より始められた「国際青年育成交流」事業の外国青年招へい日程の一環として開催されるプログラムで、同事業に参加する日本派遣青年と外国招へい青年など約300人が一堂に会しました。開会式の後、日本放送協会（NHK）の解説委員長である今井義典氏による「異文化交流と世界の読み解き方」と題しての基調講演、その後にグループ討論が行われ、夜には、皇太子殿下の行啓を仰ぎレセプションが催され、和やかな懇談の場が持たれました。招へい青年は、「国際青年交流会議」を含めて表敬訪問、都内視察、課題別視察、討議セッションなどの東京プログラムの後、4府県（滋賀県、京都府、大阪府、鳥取県）に分かれてのホームステイを含めた地方プログラムに参加し、7月11日からの21日間にわたるプログラムを終了し7月31日帰国しました。

基調講演

「異文化理解と
世界の読み解き方」



▲ NHK 解説委員長の今井義典氏



▲ 熱心に質問する外国招へい青年





分科会

～異文化理解と
コミュニケーション～



平成16年度「国際青年育成交流」事業（招へい）における「国際青年交流会議」において、NHK解説委員長である今井義典氏による基調講演が行わ

れました。今井氏は、英語で講演されましたので、講演の際の同時通訳によるものから要約して抜粋させていただきます。

「異文化交流と世界の読み解き方」

講演者：今井 義典氏



アメリカ留学時代の思い出

このステージに立ち、世界から来られた若者の顔を拝見していると、40年程前の自分自身の経験を思い出さずにはられません。1966年、東京の大学生だった私は、アメリカ政府の学生リーダー交換プログラムに参加し、9か国9人のアジア太平洋の学生と交流を深めました。アメリカを75日間旅行し、多くの都市でホームステイやキャンパスステイをしました。行動を共にしたアジアの学生とはもちろん、

同世代の学生や、世界に目を開いた様々な人たちと交流を重ね、大変素晴らしい思い出を作りました。すべて昨日のことのよう鮮明に覚えています。

忘れられない面白いエピソードのひとつをご紹介します。それは、グループのうちの二人のメンバーのことです。一人は韓国の学生で北朝鮮からの難民、よく厳しかった朝鮮戦争当時のことを話してくれました。もう一人はインドネシア軍の士官で、ジャカルタの大学院で勉強中、しかし1965年9月30日のクーデターにも関わったこともあり、私たちよりちょっと大人でした。旅が始まって間もなくのある日、愉快的ことが起きました。ツアーの夕食のとき、二人が奇妙な行動をとったのです。二人は私たち仲間からちょっと離れて座っていたのですが、食事がくるとあたりをきょろきょろ見回し、誰か見ていないかまずチェックしました。そのうち一人がジャケットのポケットから小さな物を出しました。赤い小瓶の様でした。彼らはお皿の上の料理にボトルから何か液体をふりかけていました。そこで私は声をかけたのです。「何をかけているの？」彼らは

主な内容

「国際青年交流会議」2004基調講演… 5～11	内閣府青年国際交流事業報告会…………… 19
ターニング・ポイント…………… 12～16	(東南アジア青年の船/航空機による派遣事業)
(日本青年国際交流機構設立20周年記念事業)	新潟中越地震への募金協力…………… 20
第8回「青年の船」30周年記念大会…………… 17	「世界青年の船」インターナショナル・リユニオン… 21
万博いきいき自転車の旅2005…………… 18～19	「にっぽん丸」船上パーティーの御案内… 22

〈表紙の説明〉

国際青年育成交流事業
地方旅行より

私を見て、「しまった、みつかったか」というような表情を浮かべて、いたずらっぽく答えました。「スパイシーソースだよ。ここの食べ物は口に合わなくて、もっと辛いのが食べたいものだから、タバスコをかけているんだ」数日前にスーパーで買ったんだそうです。周りにいた旅の仲間は皆笑い出しました。このささやかな出来事の後、彼らは遠慮なくタバスコを使い、私にも何度も勧めてくれました。韓国やインドネシアの人々は辛い食事が大好きです。すぐに私も「辛口」の味に魅せられて、ときどき口の中が炎になるような辛いスパイシーフードの仲間入りをしました。このツアーは私にとって一石二鳥のツアーでした。アメリカについて多くのことを学び、留学生の国々についても学びました。でも、何より貴重だったのは、この旅が自分の国と自分自身について考えるよい経験になったことです。自分探しをするまたとない機会でした。みなさんもきっと今回の交流事業の中で新しい世界を知り、友を得、その上自分を再発見することと思います。

今日、私は、異文化交流についてお話しするという役割をいただいています。できるだけグローバルな視点・枠組みから、皆さんの日本滞在のお役に立てるお話したいと思います。30年以上日本のテレビ局で働いているので、ネットワークのアーカイブをフルに活用して、いくつかビデオをご覧いただこうと準備してきました。3つの理由があります。一つは、

映像によるプレゼンテーションは、理解を深めるのに有効であること。二つには、目先を変えて時差ぼけの皆さんが居眠りしないように。三つめは、私の原稿を短くすることができるという不埒な理由からです。

私の働くNHKは日本で唯一、テレビとラジオ、インターネットで国際放送を世界に向けて出しています。そのうちの英語で日本のあれこれを紹介するテレビ番組“Weekend Japanology”から、レポートをいくつか取り出して編集してきました。

この3週間に皆さんは、日本で様々な経験をするでしょう。初めての経験で、理解できないこともあるかもしれませんが、しかし、多くの場合、意外にも価値観を共有しているんだ、ということがわかるだろうと思います。様々な日本を探してください。実際に見ても信じられないことがあるかもしれませんが、でも、皆さんが体験することは全て日本の側面です。その経験が全て、皆さんの栄養になります。

相互依存の世界

ビデオを見てまずひとつ、認識していただきたいことがあります。私たちの世界は相互依存の世界です。物、サービスを他の国々と交換せずに生きていくことはできません。国の存在を守るために、2国間、多国間の同意がいります。日本も、他の国々とよい関係を作らなければ生き延びることができません。簡単な例をお見せしたいと思います。このホテ





ルからタクシーで10分のところに世界一大きい築地の魚市場があります。東京とその周辺の首都圏に住む1,000万人の台所です。

日本で消費する60%の食物は、世界各地から輸入されています。ビデオでご覧になりましたが、私たちが食べている魚の約50%は世界の7つの海から来ています。きょう参加している方々の国から輸入した海産物も日本の食卓に並びます。マグロは、太平洋、インド洋、黒海、地中海、大西洋などから来ています。その他、例えばノルウェーからはサーモン、ワカサギ、サバを輸入しています。驚くべきことに、日本で消費するタコの80%は、モロッコからの輸入品です。あまりにも多く輸入しているためにモロッコではタコの乱獲が大きな問題になっています。タコを食べる習慣は、奇妙で、宗教的ではないと考える方もいるかもしれませんが、日本人の好物です。日本にいる間にぜひ試していただきたいと思います。もちろん食物だけを輸入しているのではありません。日本で消費される石油は全面的に輸入に頼っていて、私たちの今日の生活を支えています。食物の輸入を止めれば、人口の4分の1以上が飢え死にするとされています。

150年前は違いました。17世紀から19世紀半ば、徳川幕府は鎖国をし、全ての港を閉鎖しました。例外は九州の長崎の港で、諸外国のうちオランダに限って貿易をしていました。商品、植物、情報、動

物全てこの南の島で行き来しました。オランダ人の船員、商人は200年も私たちの目や耳でした。当時の日本の人口は約3,000万人、現在の約4分の1で、自給自足の生活をしていました。国民の9割以上が農民でした。鎖国政策には長所も短所もありました。国の独立を維持し、19世紀後半に近代国家を築く礎になった一方で、封建的な社会がいつまでも残り、技術の発達や国としての経済力の面では西洋の後塵を拝することになりました。帝国主義の時代であった20世紀前半、数度の戦争に踏み切って数百万人もの尊い命を失う大きな痛手をこうむって、ようやく世界は相互依存の世界だ、民主主義と平和外交こそが日本の生きる道だと気づいたのです。

日本文化の保存と発展

日本は19世紀までの鎖国中も、西洋文化を取り入れていましたし、さらにさかのぼって日本の歴史を古い時代から紐解いてみますと、有形無形の文化を中国大陸や朝鮮半島経由で輸入していました。自分たちに合う新しい考えや文化を受け入れる素地ができていたのです。皆さんも日本滞在中、日本社会の受容性をご自身で経験されるでしょう。その身近な一つとして具体的に結婚式を例にとってみましょう。

結婚式は人生で最も重要な儀式の1つで、これは皆さんの国でも同じでしょう。出生、結婚、死ほどの民族にとっても重要な人生の節目で、宗教と深く関係しています。それぞれの生活様式にも大きく関わってくる部分です。ある地域では伝統を重視してかたくなに守り、他の地域では新しいアイデアを取り入れて常に斬新なスタイルを求めています。ビデオでご覧になった日本の結婚スタイルは、様々な要素が交じり合ったものに映ったかもしれません。

現在日本の人口は1億2,500万人。キリスト教徒は100万人です。神道は300万人。残る大半が仏教徒と考えられていますが、宗教を日々の暮らしの中で厳密に実践している人は少数派です。文化は宗教との関わりの中で、時を経て多様化していきます。

日本の結婚式は、日本文化がこの1,500年間でどのように様変わりしてきたのかをよく示している例です。日本は昔から海外のアイデアをうまく取り入れてきました。

日本文化が色々な要素を取り入れながら、どのように発展し守られてきたのか、もう一つ例をお見せしましょう。私の親友滝下嘉弘さんの例です。東京から南に50キロ、鎌倉という13世紀に栄えた古都に住んでいる、民家修復の専門家です。

滝下さんの家によく招かれますが、彼は非常に美しい居住空間を持っています。日本だけでなくヨーロッパと比べても引けを取らない素晴らしい住まいです。もともとは岐阜県の雪深い山間地で朽ち果てようとしていた古い大きな農家を建て直したものののですが、日本の「伝統」とモダンを調和させた見事な建物です。数百年前の材料を活かし、シンプルながらも合理的な、建造物です。エアコンもついているし、照明効果も計算し尽くされ、現代的なテクノロジーが伝統的な佇まいの中に生かされていますが、それによってかえって伝統的な日本家屋の良さ、数百年に及ぶ暮らしの知恵や巧みが骨太に生きています。こういう民家は朽ち果てていくとか、不便だとか、居住には向いていないといってもてあました挙句、見捨ててしまう人もいます。しかし滝下さんは違います。最初は柱や梁を1本1本丁寧に取り外し、きれいに磨き上げ、傷んでいる部分を修復します。その材料をもとに新しい間取りの家を設計士、部分ごとに新しい材料を加えながら再構築していくのです。伝統への愛情と、新しいものを活かすひらめきが、大変居心地のよい近代的な家屋を生み出すのです。日本の伝統をとことん維持しながらも、海外のアイデアのいいものは取り入れていくことで日本文化の魅力をさらに高めているのです。彼は才能豊かな人で、他の人の目には保存する価値がないと映る物にも、価値を見出すことができます。皆さんも日本滞在中、日本の伝統や文化を保存しようとして

いる様々な分野の人々に会う機会があるでしょう。古いものを生かし、新しいものも取り入れていく、日本に息づく伝統を読み取ってください。

中空バランス構造

日本人の特色は、人目を気にする、内省的と言われる。どう他人に見られているのか、嫌われているか好かれているか知りたがるということです。自己分析が好きで、哲学者、思想家のこの分野の研究も様々に行なわれています。日本人が自分たちをどのように考えているのかを理解するために、一つの理論を紹介しましょう。

河合隼雄先生は、臨床心理学を専門とする学者ですが、現在は文化庁長官として日本の文化政策の推進や異文化交流にも尽力されている方です。先生は日本のシステムは『中空バランス構造』だといわれます。日本の神話を西洋のキリスト教伝説と比較研究し、この理論をうちたてられたのです。キリスト教文化では、絶対的な力を有する神が存在し、その手によって全世界が保たれていると考えられています。一方、日本の神話では、神は神殿にいても特に何もせず、神聖視されてはいても、絶対権力や絶対的な役割を持っていません。神様同士で喧嘩をしたりしますが、それぞれの神が他の神と権力のかなりの部分を共有し、互いに調和しています。河合先生の考えでは、この神話に由来する中空バランス構造の考え方が、今日の日本の社会制度や個人の考え方にそのまま反映されているということです。日本の地域社会、政府、オフィス等を見ると、まさにこの理論がそっくり当てはまるように私にも思えます。

この中空バランス構造は、外国人にとっては想像もつかない難しい概念です。だから日本を理解しようとしたり、日本人と交渉しようとしたりする際に、日本人の心を読み切れずに、また日本のディビジョン・メーカーの仕掛けがよく分からずに、混乱を招きがちなのです。かなり以前から日本は市場の開放に努めてきており、今では世界に十分開放されて

いるといえるでしょう。ただ農産物は例外ですが。しかし今でも、日本の市場は最も厳しい市場だと多くの外国人は言います。優れた商品があっても、市場参入が難しい、韓国、中国よりも投資が難しいと。とりわけ誰がどう物事を決定しているのか、外からは皆目見当がつかないというのです。その人たちが河合先生の理論を会得すれば、日本とのビジネスにかなりの成果を挙げることができるのではないのでしょうか。機会があったらぜひ河合先生の中空バランス構造の理論を勉強してみてください。彼の理論によって、私たち日本社会の実際の仕組みのかなりの部分が説明できるし、多くの日本人の行動パターンの基本になっているといえると思います。この理論は皆さんが日本で直面する多くの現象を説明してくれるでしょう。

以心伝心

日本に来て日の浅い外国人の友達に、時々尋ねられることがあります。日本人は秘密のコミュニケーション、例えばアイコンタクト、小さなジェスチャー、テレパシーを使い、目に見えないコミュニケーションをするのではないのかと。皆さんはそんな経験したことがあるかわかりませんが、この疑問に私は「イエス」と答えることにしています。何百年間も私たちは他の人の心を読み、感情に入っていく方法を身につけてきました。仏教の禅宗ではこれを『以心伝心』と呼んでいます。何も言わなくても他人を理解できるということです。言葉を使わず心でコミュニケーションします。皆さんもすぐに経験することでしょう。

禅宗について少し説明させてください。仏教の宗派の1つで、12世紀に中国から日本に伝来しました。禅宗の真髄は、苦行を行い禁欲的な生活をして初めて悟りの境地に至るといえるものです。禅宗は中世の日本文化に大きな影響を与え、今日でも日本の文化、考え方に少なからず影響しています。もう1つビデオを観ましょう。禅宗と座禅の瞑想についてです。

禅宗は多くの外国人を魅了し、仏教の教えを実践している外国人僧もいます。2週間前、私は京都の禅宗のお寺を訪れる機会がありました。静けさ、清らかさを経験することで身も心も清められたような気分になります。民族、文化、言語、宗教に関係なく、この感覚は誰もが共通に感じられるものだと思います。これは重要なことで、異文化交流発展の鍵を握るものです。

かつて情報の伝達はまさに人の移動そのものでした。徒歩の使者は時速4、5kmで情報を伝えました。今年はギリシャでオリンピックが開かれますが、オリンピックといえは2500年前、フィリピデスという兵士が、マラトンの戦いでギリシャがペルシャを打ち破ったことを知らせるため、アテネまで走りつづけ、役目を果たして息絶えたという故事を思い出します。その後、馬等の動物がひとの移動と情報伝達の手段として使われ、やがて鉄道、船、自動車、さらには航空機で取って代わりました。江戸から京都まで513kmありますが、江戸時代には徒歩で約20日間かかりました。今では、最高時速270kmの東海道新幹線で2時間15分です。来週皆さんは、新幹線の旅を楽しまれるでしょう。マルコポーロがイタリアのベニスから中国の首都に行くのに3年以上かかりましたが、皆さんは、わずか12時間のフライトでヨーロッパから東京に来られましたね。

グローバル時代の対話法

コミュニケーションの変化を見てみましょう。何がコミュニケーションのスピードを劇的に変えたのでしょうか。まず1837年の電報の発明です。1876年になると電話、そして1900年代初めにはラジオが発明されました。情報の伝達速度は、この5、60年の間にテレビ、コンピューター、通信衛星、インターネット、携帯電話が生まれたことで飛躍的に早まりました。このめざましい情報技術の発達によって、私たちはいつでもどこでも瞬時にコミュニケーションをとることができます。世界はどんどん



小さくなっています。しかし、情報のスピード、量が著しく増えたからといって、世界の人々の相互理解が深まり、世界がより安全になったわけではありません。私たちが自ら問わなければならないのは、私たちが自分自身のことを、そして同じ地球上に住む他の人たちのことを、どれくらい理解しているのか、その努力を傾けているのか、ということです。内向きで受身の姿勢では進歩はありません。

先ごろアメリカの雑誌「ナショナル・ジオグラフィック」が、世界の若者がどの程度、世界地理についてどのくらい知っているか調査しました。アメリカ、カナダ、メキシコ、フランス、ドイツ、イタリア、イギリス、スウェーデン、日本の9カ国から無作為に300人～500人の若者を選び、約3,000人（18歳～24歳）から回答を得ました。人口や気候、エイズの広がり、宗教の違い、政治の仕組みや経済、さらには核保有国等、大人ならば誰でも知っているような質問をしました。その結果、若者たちの世界地理や社会についての知識が非常に乏しいことが浮き彫りになりました。アメリカの若者の中で、地図の上でアフガニスタンの位置を指し示すことができたのはわずか17パーセントに過ぎませんでした。また「核保有を公式に認めている国を4つ挙げよ」という問題でも、成績のよかったドイツ、スウェーデンの若者でも36%の正答率にとどまり、4%しか正答率がなかった国もありました。

このような地理的な知識は言語能力や旅行によって培われるものです。母国語以外の外国語を話せる人はスウェーデンで最も高く89%、最低は日本の19%。日本の若者の海外経験の少ないのも目立ちます。情報化時代、通信技術があるといっても、まだまだ道のりは遠いということです。世界に目を向けず、自分の世界だけに閉じこもっている安易な生き方を選びがちなのです。

情報化社会に生きる私たちのあるべき姿勢は、多元主義、文化的な多様性を理解する努力を惜しまないということです。そのためにメディアは大きな役割を果たしています。一人一人がそれぞれにICTを活かしてコミュニケーションを取り合えるようになったことも情報化社会では重要な進歩ですが、「社会的」な存在である人間にとっては、これでは限界があります。大事なことは、多くの人々が信頼できる情報を共有し、その情報に基づく判断を同じ基盤に立って行う、それが「共同体」を地域規模で、そして地球的規模で維持して行く上で、極めて重要なことなのです。マスメディアを通じた地域や国境を越えたコミュニケーションは今後も、世界の平和と持続的な発展のために欠かせないものです。それによって人々は物事の正しい位置づけを知ることができ、グローバル社会における情報交換の基盤にもなるからです。

情報格差を埋めるために勢力を注ぎ込むことも情報化社会では極めて重要です。これまで光の当たらなかった世界にラジオやテレビ、そしてインターネットや携帯電話による「明かり」を投じることによって、教育の機会を与え、相互理解を促し、相手を受け入れる心を育むのです。国際関係でメディアの果たす役割はますます大きくなっています。しかし他人を当てにするだけではなく、一人一人が前進のための手立てを講じなければなりません。貴重な文化、伝統、歴史をどのように伝え合えるのか。どうすれば多様性が敵意を煽るものではなく、共存の推進力にすることができるのか。言語の異なる人々

の間でどのように共通の基盤を築くことができるのか。政治的、経済的、社会的に条件の異なる人々の中で、どのように共通の基盤を作っていくのか。21世紀の限りなくグローバル化していく世界に住む私たち人間にとって「教養ある人間」の役割は何なのか。グローバル時代の対話方法を身につけた人々をどのように育成していくか。こうしたあらゆる問題に真剣に取り組まねばなりません。

政治家や政府関係者は共通の利益、共通の懸念がどこにあるのか考慮し、共通基盤を作らねばなりません。どこに住んでいようとも、私たちは多かれ少なかれグローバル化の影響を避けることはできませんから、私たち自身もこの問題に取り組む必要があるでしょう。グローバル市場で働くビジネスマンは、文化の異なる人々を仕事のパートナーにしなければなりません。日本でも10の仕事があれば、3つは何らかの貿易や国際取引と関わりがあると言われる。一人一人が自分の属する社会の情報と、他の地域に住む人たちの情報とを交流させるコミュニケーションの方法を学ばなければなりません。

現在、私たち人類の平和や安全に対してテロ、貧困、エイズ、環境破壊など新たな脅威の刃が向けられています。このような死活的な問題に対処するためにも、世界の他の地域に住み、宗教や言語、文化を異にする人たちのことを学ぶことが大切です。グローバル化に伴う課題に立ち向かうためには、強い意気込みが要ります。政府だけでなく、企業、学校、個人、NGO、市民運動団体等のレベルでも必要です。かつて複雑な国際的な交渉は専門家や外交官に任されていたが、これからはエリート層だけでなく全ての人がこのグローバル時代の対話法を身につける必要があります。世界についての知識がすべての人に欠かせないのです。

一期一会の精神

最後にまとめとして、もう一度禅宗の教えの言葉を引用させていただきます。『一期一会』。直訳すると、

一生に一度会う、ということですが、もっと深い意味があります。「今日あなたが会うあらゆる人との出会いを大切にしよう、二度と会えないかもしれないのですから」というものです。これは日本の伝統文化である「茶の湯」で育まれた大切な考え方です。茶の湯も、日本の中世に禅宗と共に育まれた文化です。「いつでも、すぐ会える」と思うから、親しい友とでさえ注意が散漫なまま、会ってしまう。でももし「もう二度と会うことはできない」と判っていたらなら、どのような態度を取るでしょうか。相手の一挙手一投足に注意を払い、相手が何を語りかけているのか細大漏らさず耳を傾け、その人の全人格を全身で受け止め、そのすべてをまぶたと心に刻みつけようとするのではないのでしょうか。そしてあなたの全身全霊を籠めて、悔いを残さないように接するはず。友に会うときは、この「一期一会」の精神を持って接するべきです。会えたことに感謝し、二度と会えないかもしれないという気持ちを忘れないことです。38年前私はアジア太平洋の9人の学生と一緒にアメリカに行き、非常に多くのものを得ました。75日間のアメリカ留学を振り返ると、「一期一会」の意味がよくわかります。その時の体験がきっかけになって、私はテレビのジャーナリストになる決意をしました。一度しか遇えないひとや出来事との出会いを大切に、その喜びと悲しみを一人でも多くの人に伝えたいと思ったからです。現在も人と会う時はこの一期一会の精神を貫こうと心に誓っています。

日本訪問によって、皆さんが新しい刺激と心に刻み込まれるような体験をし、生涯の友に出会われんことをお祈りしています。そしてこの事業が実り多きものになり、参加者一人一人の国際的な視野を広げ、つながりを深める機会になることを心から願っています。ありがとうございました。

～ターニング・ポイント～

河合純子さん（昭和37年度「日本青年海外派遣団」団員）

日本青年国際交流機構設立20周年記念企画として、事業参加者からユニークな活動をされたり、各界で活躍されている方を取り上げて本を作成する企画が進んでいます。その中から何人かの方をマクロコズムで紹介させていただきます。

今日は、昭和37年度「日本青年海外派遣団」に参加された兵庫県在住の河合純子さんをお訪ねしました。河合さんが事業に参加された当時の日本社会の状況、当時の経験が現在の活動にどのように結びついているのかお話しいただきました。

日本青年国際交流機構設立20周年記念企画として、事業参加者からユニークな活動をされたり、各界で活躍されている方を取り上げて本を作成する企画が進んでいます。その中から何人かの方をマクロコズムで紹介させていただきます。

今日は、昭和37年度「日本青年海外派遣団」に参加された兵庫県在住の河合純子さんをお訪ねしました。河合さんが事業に参加された当時の日本社会の状況、当時の経験が現在の活動にどのように結びついているのかお話しいただきました。

Q：本日は、忙しい日程の中で、ありがとうございます。早速ですが、当時の派遣団の構成はどのようなでしたか。

河合：派遣団に参加した当時、私は幼稚園に勤めていて、非常勤で英語を教えていたの。派遣団の中で英語が話せるのは東京の方と私と3～4人くらいだった。団員は全部で14人、そのうち女性が4人。

Q：今と全く逆ですね。今は、12名の団員のうち9名女性、3名男性。場合によっては男性2名になる。当時、参加するための、かなりの

倍率で難関だったということですが、意欲的な方がたくさんいらしたでしょうね。河合さんと同じ団の方には、国会議員になられた方も二人いらっしゃるのですね。この期は、大学教授になられたり、社会的に活躍されていた方が目立ちますね。政治家としては、山崎拓前衆議院議員、大野松茂衆議院議員もそうでいらっしゃいますよね。

河合：そうそう、上杉さんと（上杉光弘前参議院議員）岩永さん（岩永峯一衆議院議員）が同じ団でしたね。繋がりが強い代だと思います。それから、当時は海外に行くということそのものが考えられないような時代でした。

Q：夢のような世界ですよ。

河合：水杯をかわして出発するというような。海外旅行も自由化されていないし、持ち出すドルも制限されていた時代でした。

Q：お小遣いもあまり持っていけなかった？

河合：いいえ、持っていかなかった。ほとんどいらなかったわ。真っ白なジュラルミンのスーツケースも一つ提供されて、団服にもちゃんと「日の丸」をつけていたの。



▲メルボルン市庁でサインする団員達
右から2番目が河合さん／右端メルボルン市長

最初は、シンガポールまで船で行って、そこからインドネシア、オーストラリアまでプロペラ機で行ったの。行けども行けども地面が赤い。オーストラリア大陸の赤いのがすごく印象的でしたね。

Q：派遣団に応募されたきっかけはどういうものだったんですか。

河合：子供会の活動の関係から推薦されて。試験を受けてみないかって。

Q：親御さんの反応はいかがでしたか。

河合：「そんなもん行けるんか」って感じだった。少しは自分が費用を負担しないと参加できなかったんです。たしか、5万円くらいだったかな。でも、当時の5万円って今の50万円位なんですよ。私は知らなかったのだけど、父が田んぼを売ったらしいですよ。今頃すごく気になってね…。

Q：昭和30年代後半だと、1か月の給料が1万円くらいでしたね。

河合：私が貰っていたのが8千円位でした。

そう。5万円払うのは大変だったわ。

河合さんの御主人より「1万3千8百円。」とのコメントが入る。

河合：それ位だわ。5万円ていったら4か月分です。それを父が畑を売って出してくれたって40年ぶりに聞いて、なんか悪いことしたって思ってね。私、ぜんぜん知らなかったから。

Q：事業に参加するとき、大変だったことがありますか。

河合：仕事をだれかに代わってもらうことでした。後輩に代わってもらったんです。その人が次の年の派遣団に参加したんですけどね。

Q：プログラム中の感じたことといえば？

河合：日本人同士でも違いがあるということかな。現地の若い子との交流会で話す際の考え方の違いよりも同じ団の15人のメンバーでの違いの方が強く感じました。些細なことですけど、議会の公式訪問、大学訪問、ランチ・パーティのときに何を着るかだけでも意見が分かれるんです。着物を着なくてもいいと思うような場所なんだけど、着物を着て行こうと言う人がいたり…。価値観というかセンスの違いがありました。今はそうではないかもしれませんが、地方の人と東京・大阪組とは違っていました。

Q：年齢差はあまりなかったんですね。確か20歳から25歳位まででしたね。

女性にとっていろいろ大変だった時代という気もするけれど、派遣団の中に女性が3分の1位いたというのは、活躍している人が選ばれたということなのでしょうね。なにか、すごく大変だったということはありませんか。

河合：ブラジル班と南米班だけは男性でした。欧州班は4名いて、東南アジア班は2名だったかな。女性だからということでの特別なことは、なかったですね。でも、一番緊張したの

は香港でしたね。

Q：当時の香港はどんな雰囲気でしたか？

河合：国際都市でいろんな人がいました。私たちが団服着ていたからかな、じっと見られるのですよ。見られることの緊張感、恐怖感。とにかくストッキングは絶対はくように言われたんです。

Q：ニュージーランド、オーストラリアで、東洋人だからといって嫌な思いはされましたか？

河合：派遣団の時は、全然なかったですね。でも、お客さんの間は、カナダでもどこでもないけど、住めばあります。

日本もそうでしょ。1日、2日のホームステイなら喜んでさせてくれるけど、住人となると……それと同じです。

Q：当時の写真を拝見させていただけますか。この写真の表情いいですね。

河合：これはニュージーランドの小学校訪問の時。

Q：今も当時の派遣団の人たちと仲良くなさっているんですね。

河合：はい。最後に集まったのが、熱海で上杉さんの自治大臣のお祝いをしたとき。今度も集まろうと言っているのだけど…。

～自分自身のテーマを持って～

Q：河合さんは、子供会の活動をされていたそうですね？

河合：そう。地区のことをしてたものですから。

保母ということで事業に参加しました。

Q：帰国後も子供会の活動を続けられましたか？

河合：結婚してカナダに移るまで続けました。

Q：派遣団の皆さんは、自分のテーマを持って行かれたんですね。

河合：そうでしたね。その頃私はYMCAのリーダーもしていて、YMCAからマオリの踊りを習っ



てきてくれてって言われていたんです。だから、ニュージーランドで一生懸命踊りを習って、帰ってきてマオリの踊り方の小冊子を出したんです。向こうの本を買ってきて翻訳して。結婚してカナダに行くまでよく踊っていましたよ。団員の

ともちゃんが、浴衣と踊りの服を一つ交換してYMCAに寄付したんです。

Q：活動がすごく具体的で、いいですね。今でも？

河合：歌ぐらいいは。すごい綺麗なんです。ポリネシアン之歌で。フラダンスと似てますけど、フラのように動かない。すごく綺麗な踊り。

Q：男性の踊りと全然違うんですね？

河合：そうです。楽しかったですね。

～夢を持って～

Q：カナダの話が出ましたけれど、カナダへいらしたのは御主人のお仕事の都合ですか。

河合：いえいえ。勉強したかったからよ。帰ってきてもう42年だわ。行ったのは1963年の11月。帰ってきて、また1年ほど幼稚園で仕事をして、もう一度英語を勉強し直して。

Q：やはり派遣団に参加したのは、河合さんにとっ

て、人生の転期になりましたか。

河合：ものすごく。若い子には絶対になりますよ。だからもっと若い子に行かせてやりたい。例えば、高校生って、将来何になりたいかとかあまり考えてないでしょう。そういう時期に参加するとすごく違うと思う。

Q：自分自身のことを考える。

河合：そう。自分を発見できるっていうか。その時は具体的にこうしたいというわけじゃないけれど。いろんなところに行くと、自分の中で行ったことのあるところとのつながりができるでしょ。自分の土俵が大阪とか日本とかに限定されなくなる。私はオーストラリアに行きたくて、夫は大阪府の派遣でヨーロッパに行ったもので、ドイツに行きたくて。それがどうしてカナダに行ったかという、YMCAと一緒に働いていた主事の人から、カナダなら永住ビザが取れるから、勉強もできるし、働けるっていうんで。私その頃バンクーバーの「バ」の字も知らなかったけど。

～マルチカルチャリズム、平等の国「カナダ」～

Q：カナダへ行くことに不安はなかったですか？

河合：二人やったら行けるかなと。不安って全然なかった。カナダへは2週間かけて貨物船で行ったんです。YMCAの方がいろいろ手配してくれて、あちらのYMCAの方が迎えに来てくれたんです。そして、その家に2週間泊まって。それから10日かけて大陸横断鉄道でトロントに行きました。そこで私はすぐに働き出したんです。夫はもう一度勉強したいというんでね。10年間カナダにいましたって言うと、御主人のお仕事の都合でですかっ

て、絶対訊かれますけど。

Q：御主人は勉強なさっていたんですか。

河合：そうですね。勉強だけしていても大学院ではお金が貰えるんですよ。でも私は家にいたくないし、仕事をしていました。それに仕事は一杯ありました。

Q：言葉ができたからですね。カナダの社会って基本的には平等なんですか。

河合：そう、顔の色だけでは絶対に差別しない。トロント大学を歩いていたら、地下鉄どこ？って私に訊くんです。全ての人がカナディアンって思っているんじゃないですか。肌の色の違いとか関係ない。今バンクーバーに行くと、8割はアジア、中国人です。毎日、白菜の漬物を買に行きましたね。

Q：カナダでは抵抗感というのを感じませんでしたか。

河合：ないですね。でも、それはお客さん扱いられている間だけです。仕事をするとなると、英語のネイティブが優位でした。

Q：仕事だったらまどろっこしいですね。

河合：そう。でも、表面的には差別はなかった。

Q：ベースが平等というのはとても大事ですよ。

河合：今はいわゆるマルチカルチャリズムといって、多民族国家として、差別をしたら罰せられる憲法があるんですよ。仕事の面接で年齢を訊かないのと同じで、人種で差別すること



▲ マオリ族の踊りを習う

は絶対にない。人種のるつぼがアメリカで失敗してるから、カナダはモザイク国家なんです。

Q：それぞれの出身の文化を大事にしていますよね。

河合：そうするように法律で定められたから。

～受けたものを返せる人の派遣～

Q：カナダ会の活動をずっと続けていらっしゃいますよね。どんなきっかけで？

河合：昔、何も知らない国に行って、そこで受けたもてなしが今の私、今の河合家を作ってくれたという思いがあるから。カナダで10年間一緒に子育てをした日本人同士が、帰国して年に一度、子供たちの同窓会をしていたんです。これを拡大して、私たちが受けたもてなしに報いるために、カナダ人をお泊めしたり、カナダに来る日本人のお世話をしたりしていました。今の人に、昔受けた恩を返したい。というか自分が楽しみたくて日本とカナダの交流をしているんですけどね。

Q：河合家のすごいところは、お客さんがいつでも温かく迎えてもらえるところですよ。そういう環境で育ったから、お嬢さんの真理枝さんも「世界青年の船」にも参加されたんでしょうね。世界船への参加はお母様が勧めたんですか。

河合：最初は、亡くなった山口さん（元日本青年国際交流機構近畿ブロック幹事）が推薦してくれたんです。最初の年は駄目だったのですが、次の年に第10回「世界青年の船」で行ったんです。神戸のYMCAに勤めていたけれど、結局辞めないと行けなかった。

Q：河合さんは、幼稚園は辞めなくてすんだので

すよね？

河合：代わりの方を紹介して、帰ってきたら1年は、幼稚園で返すということで。個人経営の幼稚園だったからできたんだと思います。

Q：幼稚園の経営者の方の理解があったんですね。子供たちに具体的にどう返されたんですか？

河合：英語の先生だったから、向こうのものを見せたりしました。

Q：子供たちに具体的なものを与えることができたわけですね。

河合：一番思うのは、先生とかを行かせてほしいということです。先生だけというのも結構あるらしいんですけども。

Q：先生だけだとあまり効果的ではないかもしれませんね。

河合：そう。先生、先生で集まっちゃうから。そうじゃなくて、肩書きを抜いて船に乗る。帰ってきて人に返せる人に行ってもらいたい。成果を人に返せる人ね。

Q：そうですね、本当に。帰ってきて、人に返せる人に参加してほしいというのは。お話しは尽きないのですが、あっという間に時間がたってしまいました。どうもありがとうございました。



～全国から115名集う～

30周年記念大会会長 任田 敏夫

第8回「青年の船」は、1974年（昭和49年）12月10日、東京晴海をオセアニア（訪問国は、パプアニューギニア・オーストラリア・ニュージーランド・フィジー）に向けて出航、当時のオイルショックの煽りを受けて46日間という「青年の船」としては最も短い運航日程でしたが、航海中、タスマン海で新年を迎え、現地では休暇中にもかかわらず、ボランティア団体の方々の協力によりホームステイを経験するなど、実り多い航海でした。

あれから実に30年の年月を経て、当時20代で乗船した若き青年たちは今や50代、熟年の域に達しました。第8回「青年の船」は、下船後、翌年から毎年全国持ち回りで集いを開催してきました。そして、このたびの「第8回青年の船30周年記念大会」は、アテネオリンピックで日本選手のメダルラッシュで沸いている最中、平成16年8月21日（土）・22日（日）、熱海温泉「大月ホテル」において盛大に行われました。

当日は、鷺尾管理官、馬場主任教官、川島船長、名越一等航海士をはじめ、管理部・教官・団員とその家族など総勢115名の仲間が集いました。

定刻、大宴会場に参加者全員が揃い、はじめにこの間、不幸にして日高団長をはじめとして18

名の仲間を失ったことを報告し、黙祷を捧げた後、鷺尾管理官の挨拶と川島船長の発声で乾杯しました。

記念大会を開催するにあたり、ニュージーランドのヘレンクラーク首相からお祝いのメッセージや海外在住の仲間からも多数のメッセージをいただきました。30周年の開催にあたり、ここまで支えていただいた鷺尾管理官と毎年我々と共に参加していただいた川島船長のお二人に、これまでの感謝の意を込めて、参加者全員からささやかな記念品を贈らせていただきました。

参加者はそれぞれ30年前を振り返り、青年の船事業のすばらしい思い出と友情をかみ締めながら、メインの宴会は青年の船の歌大合唱で締め、二次会に席を移し、二次会では、仲間から差し入れされた全国の銘酒・特産品をいただきながら、ここでも夜が更けるまで語らいは尽きることがありませんでした。

実行委員会としては、この30周年で一区切りをつけるつもりで臨みましたが、会場のあちこちから、「来年はどこだ？」と声がかかり、まだまだ開催を名乗り出るかぎり8回生の集いは続きそうです。



万博いきいき自転車の旅2005

第11回「青年の船」永松三千生

来春（5月8日～5月30日）、愛知で開催される『愛・地球博』を記念して日豪米伊合わせて39名(2004年11月現在)の自転車愛好家がオーストラリア館から出発し広島へ向かって自転車で走ります。

愛知万博でのオーストラリア館のテーマは『高齢化社会—健康と福祉』です。

日豪の中高齢者が自然に優しい自転車で、立ち寄る各地の方々と友好を深めながら『地球環境の保護・高齢化社会への対応』に関するメッセージを携えて走るというこの計画に、駐日オーストラリア大使館及び政府代表ポール・モロイ万博担当官から賛同を得、甚大な支援を受けることになり

ました。また豊田市、名古屋市などの国際交流課の協力を得ることができるようになりました。私どもは各地の日豪友好協会や国際交流団体(サーバス、ロータリークラブなど)、日本青年国際交流機構(IYEO)などと連絡を取り合い、民泊などをお願いしようと思っています。

事前に一度走行し、その結果で走行道路や日程は変更されるかもしれませんが、スケジュールを次のように決めました。

今後、立ち寄る各地の国際交流活動を推進されている方々や自転車愛好家の方々のお知恵、ご協力をいただきたく思っております。どうぞよろしく申し上げます。

日程（すべて暫定でこれから交渉の予定を含む）

- 5 / 5 オーストラリアのサイクリスト来日（中部新国際空港）
- 5 / 6 愛知万博開催地周辺散策
- 5 / 7 万博見学／豊田市役所訪問／市民交流
（ここまで豊田市民泊）
- 5 / 8 万博オーストラリア館でセレモニーの米原へ向け
出発（エキシブ琵琶湖泊）
- 5 / 9 丹波町（姉妹町）経由し京都へ（京都民泊かYH泊）
- 5 / 10 京都市散策（京都民泊かYH泊）
- 5 / 11 嵐山・木津を経て奈良へ50キロ（奈良民泊）
- 5 / 12 奈良市役所訪問／奈良散策（奈良民泊）
- 5 / 13 大和高田市（姉妹都市）を經由して大阪へ
- 5 / 14 大阪散策
- 5 / 15 大阪城 万博跡地散策（ここまで大阪民泊）
- 5 / 16 大阪市役所、府庁（姉妹都市・州）訪問予定
大阪南港からフェリーで神戸（神戸民泊）
- 5 / 17 兵庫県庁、神戸市役所（姉妹都市・州）
訪問予定／神戸散策（神戸民泊）
- 5 / 18 姫路へ60キロ
- 5 / 19 姫路市役所(姉妹都市)訪問予定、植村直己冒険館
(可能であれば)、姫路城など散策
(ここまで姫路民泊)

- 5 / 20 岡山県庁（姉妹州）訪問予定
倉敷へ100キロ（倉敷民泊）
- 5 / 21 倉敷散策から尾道へ80キロ（尾道民泊）
- 5 / 22 しまなみ街道を走り今治へ80キロ
（サイクリングターミナル泊）
- 5 / 23 松山へ70キロ、松山を出発しフェリーで呉港へ
- 5 / 24 広島市役所訪問予定、平和公園・原爆ドーム訪問
（ここまで広島民泊）
- 5 / 25 車か列車で愛知県知多市へ
- 5 / 26 知多市の体育協会会長山本英毅宅 送別会
（ここまで知多、安城、大府へ分かれて民泊）
- 5 / 27 「シスターシティ フェスティバル2005」
オープニングレセプション（交流会への参加）
- 5 / 28 名古屋市役所(姉妹都市)訪問予定、名古屋散策
（ここまで名古屋市民泊）
- 5 / 29 名古屋まつり
「姉妹友好都市オープンカーパレード」
市内中心部パレードへ自転車に参加
会場でのステージイベントへの出演等
- 5 / 30 オーストラリア・サイクリスト帰国（中部国際空港）

私たちはオーストラリアの自転車冒険家スタン・ジャクソン氏(91歳)の考えに賛同し集まった自転車愛好家のグループです。2000年秋、メルボルンからシドニーまで20名(平均年齢65歳)で走破した後、2002年春、京都～名古屋～東京を走破しました。

65歳から単独で世界を走り始めたジャクソン氏は地球の環境が破壊されている状況を目の当たりにし『調和』の大切さを感じたとされます。74歳のときオーストラリア建国200周年を祝い、21歳から74歳までのオーストラリアのサイクリストと走ってから、『調和の旅』が始まりました。そして来年の『万博いきいき自転車の旅2005』が決行されます。

ジャクソンさんは2002年に『88歳、8万キロを目指して』(日本語)を出版され、そして今年9月に『親たちよ、若者たちよ!—What's wrong for our young』(日本語・英語)が東京神田の清流出版から出版されました。この本の印税は第三世界の子供たちの健康と教育のために使われます。一度目を通していただければ幸いです。ジャクソン

さんの考えや旅の目的が描かれています。(『永松三千生』のホームページでも見ることができます)

オーストラリア人 25名(平均年齢60歳)
日本人 10名(平均年齢68歳)
アメリカ人 3名、イタリア人 1名

◇代表者 オーストラリア

キース・エドワード (Keith Edwards) 69歳
30 James St Teralba 2284

スタン・ジャクソン (Stan Jackson) 91歳
52 Osborne Road Lane Cove NSW

◇代表者 日本

呉山広次郎 (Kojiro Kureyama) 69歳
〒470-0344 愛知県豊田市保見町南山121番地

山本 英毅 (Hideki Yamamoto) 70歳
〒476-0001 愛知県知多市八幡東前田102

永松三千生 (Michio Nagamatsu) 52歳
第11回「青年の船」 渉外団員
〒441-8064 愛知県豊橋市富本町東山73-3-202
0532-48-5377 (tel/fax)
e-mail: cei73580@hkg.odn.ne.jp

平成16年度 内閣府国際青年交流事業 事業報告会

事業名	開催日	開催場所/時間
第31回「東南アジア青年の船」事業	2005年1月23日(日)	(独)国立オリンピック記念青少年総合センター国際会議室 13:00～16:30(予定) ※参加費はすべて無料です。
平成16年度「国際青年育成交流」事業 「日中・日韓青年親善交流」事業	2005年2月20日(日)	

〈申し込み先〉参加をご希望される方は、お名前、参加希望事業名、参加事業/紹介者、連絡先を御記入の上、下記の問い合わせ先まで郵送、電話、FAX、E-mailにてお申込みください。

〒130-0013 東京都中央区日本橋人形町2-35-14 東京海苔会館6階

(財) 青少年国際交流推進センター 「〇月〇日事業報告会係」

TEL: 03-3249-0767 FAX: 03-3639-2436 E-mail: hq@iyeo.or.jp

新潟中越地震への募金協力

御存知の通り、10月23日に起こった新潟中越地震は大きな被害をもたらしました。新潟県IYEO（新潟県青年国際交流機構）会員や関係者の中にも、被害に遭われ、自宅に損害を受けたり今も避難所での生活を続けている方がいらっしゃいます。先日開催された第40回全国推進会議及び全国大会佐賀大会にて、新潟中越地震並びに夏の台風によって大きな被害を受けた福井県と福島県へのお見舞金の募金活動を行い、多くの皆様から御協力をいただきました。心から御礼申し上げます。詳細につきましては、次号の全国大会報告記事にてお知らせさせていただきます。また、新潟県IYEOが下記の内容でお見舞金の呼びかけを行っていますので、ぜひ御協力下さい。

被災された新潟県IYEO会員へのお見舞金受付けの御案内

10月23日に発生した新潟中越地震が大きな被害をもたらし、多くの方が避難生活をされています。この地域には約30名のIYEO会員がおり、今まで連絡が取れた方々は幸い御家族ともに無事とのことですが、お住まいはかなり被害を受けておられるようです。私たち新潟県IYEOでは、被災した会員と御家族のために何かできればと考え、お見舞い金を贈ることにしました。つきましては、皆様の御協力をお願いいたたく御案内申し上げます。

目 的	被災したIYEO会員と御家族へのお見舞金
配 分 方 法	被災状況把握後、最終的に集まった金額に応じて決定します。
受 付 期 間	2004年12月30日まで
振 込 先	(郵便振替口座)：記号 11280 番号 38188341 加入者名 新潟県青年国際交流機構
募 金 金 額	端数を出さないために勝手ながら、一口500円としてお願いいたします。
お 願 い	◆申し訳ありませんが、振込み手数料は御負担願います。 ・手数料：1万円以下210円、1万円～10万円まで340円です。 ・郵便貯金総合通帳「ぱるる」お持ちの方は口座間振替ですと、手数料は送金額にかかわらず窓口利用140円、ATM利用130円です。 ◆新潟市にお越しの機会がある方は直接お預かりすることも可能ですので、御連絡ください。(受付：小田)
問 合 わ せ 先	事務局メールアドレス：niigata_iyee@yahoo.co.jp (小田、小林)

インターナショナル・リユニオンの参加者募集!

SWYAA International Reunion in Sydney, Australiaが
第17回「世界青年の船」事業におけるオーストラリ
アのシドニーへの寄港日程に合わせて行われます。



日 程：平成17年1月31日(月)～2月4日(金)

開 催 地：シドニー (オーストラリア)

参 加 費：US330\$ (4泊5日の宿泊費、食費、移動費を含む)

SWYAA International Reunionは、IYEOとSWYAA Australiaが共催で実施する同窓会組織における公式プログラムです。このリユニオンでは、第17回「世界青年の船」事業参加青年との交流や、「にっぽん丸」船上で行われる公式レセプションへの出席、リユニオン参加青年による今後のネットワークについてのディスカッションなども予定されています。

また、船上以外の楽しく有意義なプログラムもオーストラリア同窓会によって準備されています。

〈申込み方法〉

参加を希望される方は、「世界青年の船」事業オーストラリア同窓会組織のホームページ(<http://www.swyaustralia.org/reunion/>)から直接お申し込みいただく、または、IYEO事務局へ申し込み用紙をお送りください。申し込み用紙をお持ちでない方は、IYEO事務局までお問い合わせください。



また、ホームページ上から直接お申し込みをされた方もIYEO事務局で参加者のとりまとめと名簿作成を行っておりますので、お名前を御連絡ください。

締切は、12月20日(月)とさせていただきます。御質問等がある方は、気軽にお問い合わせください。皆様の応募をお待ちしています。よろしくお願ひします。

*なお、既に直接申込みを済まされた方も、御連絡ください。

〈IYEO事務局〉〒135-0013 東京都中央区日本橋人形町2-35-14 東京海苔会館6階

日本青年国際交流機構 (IYEO) SWYAA International Reunion

担当：田中 佐代子 swyaa@iyeo.or.jp

「にっぽん丸」船上リユニオンパーティーin横浜,2005

第17回「世界青年の船」が横浜港から出航することになりますので、「にっぽん丸」船上パーティーも横浜で行います。今年も楽しい一時を、夕陽と共に過ごしてみませんか。船の大好きな仲間と共に、そして船に興味を持っているお友達を誘ってぜひ御参加下さい。

日時：1月17日(月) 18:00(受付)～21:00

場所：横浜港 大棧橋「にっぽん丸」

主催：日本青年国際交流機構(IYEO)

参加費：7,000円(当日受付にていただきます。)

参加申込：下記の連絡先まで、氏名、住所、電話番号、内閣府事業参加歴又は紹介者名を記載の上1月11日(火)必着で、葉書、FAX、メールにてお申込み下さい。

乗船証をお送りしますので、当日は乗船証をお持ち下さい。

*なお、事前申込みのない当日参加はできませんので、御注意下さい。

*詳細内容を、12月下旬IYEOホームページに掲載しますので、御希望の方はぜひ御覧いただければ幸いです。

プログラム

18:00 受付(ティー・サービス/
船内見学、ビデオ上映)

19:00～21:00 パーティー
(エスニックなお料理をお
楽しみ下さい。)～下船～

連絡先：〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町2-35-14 東京海苔会館6階

日本青年国際交流機構(IYEO)船上パーティー係

TEL 03-3249-0767 FAX 03-3639-2436 E-mail hq@iyeo.or.jp

編集後記

「21世紀ルネッサンス青年リーダー招へい」「日本韓国青年親善交流」「日本中国青年親善交流」の各事業が成功裏に終了しました。各地で受入

れに御協力いただきました皆様、ありがとうございました。また、第31回「東南アジア青年の船」が10月21日、無事に横浜港に帰航しました。

*本誌の年間講読をご希望の方は、(財)青少年国際交流推進センターまで葉書又はFAXにてお申込み下さい。年間講読料は1,500円です。

MACROCOSM(マクロコズム) 11月号 Vol.61 2004年11月30日発行(隔月発行)

編集：マクロコズム編集委員会

発行：財団法人 青少年国際交流推進センター

〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町2-35-14

TEL 03-3249-0767

FAX 03-3639-2436

e-mail hq@iyeo.or.jp

URL http://www.centerye.org (IYEO)

編集協力：内閣府政策統括官

(共生社会政策担当)

日本青年国際交流機構

定価：198円(本体189円)

印刷所：株式会社 絢文社

TEL 03-3959-3960

1973年2月14日。一隻の大型客船が横浜を出航しました。歴史的な日本初の世界一周クルーズへの出発です。それが、初代「にっぽん丸」。現在の「にっぽん丸」はそれから数えて3代目です。この間、私たちは、日本のクルーズの先駆者として、新しいクルーズや様々なサービスを開発してきました。例えば、日本船初めての展望浴場などは、ほんの一例。また、私たちの長い経験の集大成である独自の船内プログラムが、他の日本客船全てのお手本になっていたりもします。ところで豪華客船でのクルーズと言うと、リタイア後の老夫婦がのんびりと旅をされているイメージをお持ちではないでしょうか。でも、「にっぽん丸」に乗船してこられるお客様は、驚く程アクティブな方が多いのです。いや、アクティブになられると言った方が正しいのかもしれませんが。これまでの人生になかった新しい体験を、船の上で得た新しい仲間達と一緒に貪欲に吸収されるのです。自ら進んで何か新しいものを得ようとする気持ちを冒険と言うとすれば、冒険には年齢や性別なんて関係ない、私たちは、そんな皆さんの想いを満足させることを一番大切に考えています。そして私たち自身も、お客様に負けないくらいに、いつも新しい事に挑戦して行こうと思っています。これまでも、ずっとそうして来たように。

冒険する生活を選びました。

冒険する生活
にっぽん丸



にっぽん丸は、米国公衆衛生局 (USPH) による船舶衛生検査において、3年連続で日本船最高得点を獲得しました。

クルーズデスク フリーダイヤル
☎ 0120-791-211

 商船三井客船
<http://www.mopas.co.jp>

美しい時代へ — 東急グループ



旅も楽しめる合宿にしたい。



急に1週間の全国出張になった。

ひとりひとりに、満点旅行。

ONE
to
ONE



家族水入らずで楽しめるプランを。



北から南まで温泉三昧したい。

商品力、サービス力、情報力、3つのパワーで、
あなたの旅をさらに快適に。

どんな旅でも、東急観光はすべてのお客様に満足
していただきたいと願っています。そのために、オリ
ジナル旅行や団体旅行など、多彩な商品をご用意。
IT活用による最新情報入手から24時間予約まで、
リアルタイムな体制でお応えします。そして旅を熟知
した私たちのひとりひとりが、お客様の旅を親身に
なって考えます。

東急観光

国土交通大臣登録旅行業第38号
©日本旅行業協会正会員・ボンド保証会員
〒153-8550 東京都目黒区東山3丁目8番1号
<http://www.tokyukanko.com>
<http://tour.tokyu.com>